じゃんがら念仏踊りの歴史展

平成二十八（二〇一六）年六月二十五日～十二月二十五日

いわき市立いわき総合図書館　五階　地域資料展示コーナー

いわき市立いわき総合図書館

いわき市文化活用実行委員会

あいさつ

「じゃんがら念仏踊り」は太鼓と鉦、そして、歌と踊りによって演じられる伝統芸能で、念仏踊りと盆踊りの要素を併せ持つものです。

「じゃんがら念仏踊り」がいわきで初めて踊られたのは、江戸時代の初めことでした。その後、長い間、「じゃんがら念仏踊り」は、いわきの人々に愛され、いわきの人々の手によって、伝承されてきました。しかし、その間、「じゃんがら念仏踊り」が歩んだ道のりは、決して平坦なものではありませんでした。存亡にかかわる大きな危機や数多くの試練に直面し、時に、その姿を変え、今日に至ったのです。

本展では、「じゃんがら念仏踊り」のルーツや「じゃんがら念仏踊り」がいわきの地で辿った曲折に満ちた道のり、さらには、いわきの人たちとの深い関わりなど、「じゃんがら念仏踊り」の歴史や伝承にまつわる事柄を取り上げ、紹介します。

ところで、現在、「じゃんがら念仏踊り」は青年会や保存会、さらには子ども会など、いわき市内では百以上の団体によって伝承され、八月の御盆や各地域の祭り、さらには各種催事などの際に踊られていますが、地域や団体によって、踊りや音楽などに違いがあり、その特徴によって、大きく四つのグループに分けられます。

平地区を中心に分布するものは、比較的テンポが緩やかですが、三和や小川、内郷地区などに分布するものは、テンポが早く、力強いものになっています。また、遠野地区に分布するものは、太鼓と鉦のほかに横笛が入り、情趣豊かですが、歌（手踊り）の部分はありません。さらに、田人地区のものは「念仏太鼓」と呼ばれ、他の地区のものとは大きく異なっています。

また、「じゃんがら念仏踊り」は、いわき市内だけではなく、茨城県の北茨城市や福島県の広野町、楢葉町、大熊町、双葉町、古殿町、小野町、平田村などでも伝承され、それぞれの地域に深く根をおろしています。

平成二十八（二〇一六）年六月

いわき市立いわき総合図書館
いわき市文化活用実行委員会

①「じゃんがら念仏踊り」のいわき伝来

いわきの地で、「じゃんがら念仏踊り」が最初に踊られたのは、いつのことだったのでしょうか？

このことを考えるうえで、大きな手がかりを与えてくれるのが、磐城平藩が寛文十一（一六七一）年、領内に発した次の「覚」です。

覚

一、ふき花火之儀、其以前之通可仕候。たま火、流星、からくり、鼠火は可為無用事。

一、念仏おとり、百堂参、不苦。但、大勢を催し、美麗尽候儀、可為無用。

□腕□かたく可致停止之事。

一、神事祭礼之場相撲不苦。但、侍分、扶持人は可致無用。於所々勧進相撲、辻相撲、可為停止事。

寛文十一亥年七月九日

このなかで「じゃんがら念仏踊り」に関わりがあるのは、二つ目の「念仏おとり、百堂参、不苦。但、大勢を催し、美麗尽候儀、可為無用」、つまり、「念仏踊りや百堂参りは行ってもよいが、大勢で、美麗に行ってはいけない」という部分です。

このような「覚」が出されたということは、つまり、その当時、磐城平藩内で「大勢を催し、美麗」を尽した念仏踊りが行われていたことの証拠になります。

では、その頃、磐城平藩内では、どのような念仏踊りが行われていたのでしょうか？

そのことを私たちに、より具体的に教えてくれるのが、次に紹介する『穂鷹家御内用故実書』の記述です。

沢村彦左衛門、郡奉行にて、類に勝候勤方之由、是は岩城にて之事也。七万石之御所務へ三万石之新切を工夫致出候人也と云々。故に風山公、彦左衛門が菩提

之為にとて、理安寺と申寺を御開基被遊候と云々。右理安寺より、ほうさい念仏始る。尤、理安寺斗也。其唱に、風山殿へ御影向申す、彦左衛門どのへ御影向申す。じやぐわらじやぐわらと鉦をたゝき立、念仏をかまびすしく唱候は岩城の名物也。此古実なり。

『穂鷹家御内用故実書』

これは磐城平藩の藩主を務めた内藤家が延岡へ国替えになった後に書かれたものです。本来、沢村勘兵衛とすべきところが沢村彦左衛門と書かれているなど、一部に錯誤も見られますが、概ね、次のようなことが書かれています。

内藤家が磐城平藩主を務め、小川江筋という大規模な農業用水を開削した際、沢村勘兵衛は郡奉行として大きな働きをしました。勘兵衛の死後、その菩提を弔うため、風山公（内藤義概・磐城平藩主）は理安寺という寺を開きましたが、その寺で「ほうさい（泡斎）念仏」が始まりました。人々は「風山殿へ御影向申す、彦左衛門どのへ御影向申す」と大きな声で唱え、「じやぐわらじやぐわら（ジャンガラ　ジャンガラ）」と鉦を叩き、念仏を行い、これがいわきの名物になりました。

「ジャンガラ　ジャンガラ」と鉦を叩く「泡斎念仏」が、沢村勘兵衛（明暦元（一六五五）年、自害）の霊を弔うために始められ、それがいわきの名物「じゃんがら念仏踊り」の始まりになったというのです。

これによって、「覚」が発せられた寛文十一（一六七一）年当時、いわきで「大勢を催し、美麗」を尽して踊られていたのは「泡斎念仏」、つまり、「じゃんがら念仏踊り」であったことがわかります。

ところで、沢村勘兵衛と念仏との関わりを伝える史料には、光明寺の僧、歓順が書いた『小川江筋由緒書』もあります。そこには次のように書かれています。

翌年、明暦二年申七月十四日ハ一周忌ナレバ、石塔建立仕リ、年回読経ヲ営ム処ニ、江下一統、鎌田ヨリ四ツ倉迠十ケ邑余、此儀ヲ聞及バレ、当山へ相集リ、俗人

ナレバ経文ハ読メズト云テ、念佛ヲ供養スル事、老若男女ノ分ナシ。此時、人々約束シテ、此厚恩ヲ為報、月々ニ会合シテ、念佛興行ヲ成シテ菩提ト成ス。当国念佛講ハ是ヨリ初ル。来世迄此興行ハ怠リ勿ク、実ニ此用水ヲ得ル里ハ万代ノ宝也。勝為公ノ恩徳可仰可信者也。当国念仏講会合ハ当山開基也。

『小川江筋由緒書』

勘兵衛の一周忌に当たる明暦二（一六五六）年七月十四日、小川江筋の水の恵みを受ける十か村余の村人たちが光明寺に集まり、念仏供養を行い、それがいわきの念仏講の始まりになったというのです。

いわきの念仏講では「じゃんがら念仏踊り」が盛んに行われていたとの記録もあり、寛文十一（一六七一）年の磐城平藩の「覚」や『穂鷹家御内用故実書』『小川江筋由緒書』などの記述から、いわきで「じゃんがら念仏踊り」が最初に踊られたのは、明暦二（一六五六）年七月十四日のことだったと考えることができます。

②「じゃんがら念仏踊り」のルーツ

『穂鷹家御内用故実書』には、磐城平藩の内藤義概（風虎、風山公）が沢村勘兵衛の菩提を弔うため、理安寺という寺を開き、そこで「泡斎念仏」、つまり、いわきの名物「じゃんがら念仏踊り」が始まったと書かれていました。

「じゃんがら念仏踊り」のルーツとされる「泡斎念仏」とは、一体、どのようなものだったのでしょうか？

「泡斎念仏」については、喜多村筠庭（一七八三～一八五六年）が書いた『嬉遊笑覧』（参考資料1）や斎藤月岑（一八〇四～一八七八年）が書いた『武江年表』（参考資料2）に詳しい記述が残されています。それらを読むと、戦国時代から江戸時代の初めにかけ、「泡斎念仏」と呼ばれた念仏踊りが三つもあったことがわかります。

その一つは、慶長（一五九六～一六一五年）、もしくは、それ以前の時代に、常陸国の貴僧、泡斎がたくさんの弟子たちを引き連れ、太鼓や鉦のリズムを揃え、整然と踊ったもの、二つ目は泡斎という同じ名前の狂僧が一人で、江戸の町なかで、狂ったかのように踊ったもの、そして、三つ目は寛永（一六二四～一六四四年）の頃、江戸の葛西

の人たちが太鼓や鉦を打ち鳴らしながら、町なかで踊った「葛西念仏踊り」の様子が、かつての狂僧、泡斎の踊りに似ていたため、「泡斎念仏踊り」と呼ばれるようになったものです。

これら三つの「泡斎念仏踊り」のうち、いわきの地に伝えられ、「じゃんがら念仏踊り」のルーツになったのは「葛西念仏踊り」であったと考えられています。

その根拠としては、三つの念仏踊りが踊られていた時期といわきに「泡斎念仏」が伝えられた時期の整合など、いくつかのことが挙げられますが、その一つとして次のようなことも考えられます。

「泡斎念仏」がいわきに伝えられて間もない寛文十一（一六七一）年、磐城平藩が発した「覚」のなかに「念仏おとり、百堂参、不苦。但、大勢を催し、美麗尽候儀、可為無用」、つまり、「念仏踊りや百堂参りは行ってもよいが、大勢で、美麗に行ってはいけない」という記述があり、これによって、当時、いわきでは「美麗」な念仏踊りが踊られていたことがわかりますが、それが「塗笠に花唐草の如き物を付、笠の縁にきぬを垂たり。服はたちつけを着て」（『嬉遊笑覧』）いたという「葛西念仏踊り」の人たちの姿、格好と相通じるところがあり、このことからも、いわきに伝えられたのが「葛西念仏踊り」であったことがわかります。

③「道中太鼓」「ぶっつけ」「歌（手踊り）」

「じゃんがら念仏踊り」は「道中太鼓」「ぶっつけ」「歌（手踊り）」という三つの部分で構成されています。

「道中太鼓」は「道中」「道中鳴らし」「街道鳴らし」などとも呼ばれますが、太鼓と鉦（一部の地域では横笛も加わる）で演奏され、「じゃんがら念仏踊り」の一団が場所を移動する時に演奏されるもので、いわば、行進曲のようなものです。また、「道中太鼓」は、それぞれの地域や団体によって叩き方やリズムに大きな違いがあります。

「ぶっつけ」も太鼓と鉦（一部の地域では横笛も加わる）で演奏されます。太鼓を叩く役の「太鼓打ち」たちはダイナミックな振り付けや巧みな撥さばきなどを交えながら、力強く、そして、華麗に太鼓を叩きます。また、鉦を叩く役の「鉦切り」たちは「太鼓

打ち」たちの周囲をまわりながら、強弱をつけて、「チャンカ　チャンカ」と鉦を叩き続けます。「ぶっつけ」は「じゃんがら念仏踊り」の最大の見せ場になっています。

「歌（手踊り）」では、太鼓の音に合わせ、「盆はうれしや　別れた人も　晴れてこの世に　会いに来る」などと、七・七・七・七・五音の歌が歌われ、手踊りが踊られます。

ところで、江戸時代の初め、いわきで「じゃんがら念仏踊り」が踊り始められた頃、「じゃんがら念仏踊り」には「歌（手踊り）」の部分はありませんでした。

七・七・七・五音の盆歌に合わせ、手踊りを繰り広げる「歌（手踊り）」の部分がいわきに伝えられたのは、江戸時代の後期のことで、「道中太鼓」と「ぶっつけ」の部分だけしかなかった、それまでの「じゃんがら念仏踊り」に新たに付け加えられたのです。

④「じゃんがら念仏踊り」の担い手

現在、「じゃんがら念仏踊り」の主な担い手は地域の青年会などですが、江戸時代は違っていました。当時、主に「じゃんがら念仏踊り」を行い、伝承していたのは、地域の高齢者たちによって組織された「念仏講」という団体でした。「念仏講」の人たちは一年を通じ、法事や供養など、さまざまな機会に「じゃんがら念仏踊り」を踊っていました。

このことについて、いわきの民俗学者、高木誠一（一八八七～一九五五年）は『石城北神谷誌』（参考資料3）の「念佛講」の項に「年回に相當った佛のある家ではイレメイと云ひ、酒三舛、乃至、五舛位、手拭などをあげて、念佛回向して貰ひ、又、立念佛と云って、あげた手拭をかぶってジャンガラ念佛を踊って貰ふを常とす」と書いています。

一周忌や三回忌、七回忌など、亡くなった人の年回忌法要の際には、「念仏講」の人たちに頼んで、「じゃんがら念仏踊り」を踊ってもらっていたというのです。

村のなかで年回忌を迎える故人の数は、相当数にのぼっていたでしょうから、「念仏講」の人たちによる「じゃんがら念仏踊り」は、かなりの頻度で行われていたと考えられます。

⑤『磐城枕友』のなかの「じゃんがら念仏踊り」

江戸時代の宝暦年間（一七五一～一七六三年）に書かれた『磐城枕友』には、当時の「じゃんがら念仏踊り」の様子が次のように書かれています。

盆中　村里ヨリ鉦、太鼓ニテ、老若男女打交リ、十四、五ツレテ、城下ニ来リ、神社、佛寺ヲ廻リテ、念佛躍スル。甲家、新盆ノ家ノ前ニテ躍ル。又、呼入テ、念佛サスル家モアリ。甲々ヲ廻リ、夜深テ村里へ帰ル。若輩ノ男子ハ鉦、太鼓打鳴シ、十王堂十ケ所ヲ巡ル。之ヲ十十王申ストイフ。

老若男女十四、五人連れの「じゃんがら念仏踊り」の一団が、それぞれの村から磐城平の城下にやって来て、神社や仏閣、さらには新盆を迎えた家で「じゃんがら念仏踊り」を踊り、夜遅くになって、それぞれの村里に帰ったと書かれています。また、若い男たちは十か所の十王堂を巡ったともあります。

⑥明治六年の「じゃんがら念仏踊り」禁止令

明治という新しい時代を迎えて間もない明治六（一八七三）年一月、磐前県は「じゃんがら念仏踊り」の禁止令を出しました。それは次のようなものでした。

一、磐城之風俗、旧来、念仏躍ト相唱ヘ、夏秋之際、仏名ヲ称ヘ、太鼓ヲ打、男女打群レ、夜ヲ侵シテ遊行シ、中ニハ如何ノ醜態有之哉之由、文明ノ今日、有間敷弊習ニ付、管内一般、本年ヨリ、右念仏躍禁止申付候條、少年児女ニ至迄、兼テ相達置可申事。

明治六年一月

磐前縣権令　村上光雄

磐前縣参事　児玉氏精

区長戸長共

（『旧磐前縣史　禁令ノ部』　国立公文書館蔵）

これを現代的な表現に改めると、次のようになります。

いわきでは、古くから、念仏踊りといって、夏から秋にかけ、仏の名を唱え、太鼓を打ち鳴らし、男女が群れになって、夜通し歩きまわる風習がある。そして、それらの者のなかには問題行動に及ぶ者もいると聞く。明治という近代的な文明の世を迎えたというのに、このようなことが行われているのは問題である。悪い慣習であるので、本年より、念仏踊りを禁止する。子どもたちにもよくいって聞かせるように。

夜遅くにまで及ぶ問題行動や「じゃんがら念仏踊り」の古い土俗的な要素が、明治という新しい時代にそぐわないとの判断から、このような禁止令が出されたものと考えられます。

この禁止令により、「じゃんがら念仏踊り」は一時、下火になりましたが、明治時代の中頃までには息を吹き返しました。

「じゃんがら念仏踊り」を心の底から愛し、慕ういわきの人たちの思いが「じゃんがら念仏踊り」を蘇らせたのです。

⑦「じゃんがら念仏踊り」の昔と今

大須賀筠軒(一八四一～一九二二年)は、江戸時代の「じゃんがら念仏踊り」の様子を『磐城誌料歳時民俗記』に次のように書いています。

ぢやんがら念佛トハ、即、念佛躍ニテ、男女環列、鉦ヲ敲キ、皷ヲ撃ツ。

「じゃんがら念仏」は念仏踊りの一種で、男女が輪になったり、列になったりして、鉦や太鼓を叩くものだといいます。

輪になったり、列になったりして、「じゃんがら念仏踊り」を踊るのは現在も同じですが、「男女」という部分は少し違います。現在、一部の地域では女性が「じゃん

がら念仏踊り」の鉦や太鼓を叩いていますが、ほとんどの地域では男性のみによって行われています。しかし、かつての「じゃんがら念仏踊り」では、男女が、しかも老若を問わず、一緒に鉦や太鼓を叩き、踊るのが一般的な姿だったのです。

また、筠軒は次のようにも書いています。

踏舞スル者、之ニ雑リ、皷者ヲ環リ、鱗次輪行ス。

現在、「じゃんがら念仏踊り」は「太鼓打ち」と「鉦切り」の人たちによって踊られるのが一般的ですが、かつての「じゃんがら念仏踊り」には、これら以外に「踏舞スル者」、つまり、太鼓や鉦を持たず、ただ単に踊りを踊るだけの人たちがいたのです。

「踏舞スル者」たちは「皷者ヲ環リ」、つまり、「太鼓打ち」たちのまわりで踊ったり、「鱗次輪行」、つまり、「太鼓打ち」たちのまわりに作られた輪とは別に、隣り合わせのところに、独自に、いくつもの踊りの輪を作り、「じゃんがら念仏踊り」を踊っていたというのです。

さらに、筠軒は次のようなことも書いています。

男ニシテ女粧スル者アリ。女ニシテ男粧スル者アリ。（中略）或ハ菰莚ヲ鎧トシ、蓮葉ヲ兜トシ、箒、櫺木等ヲ以テ大小刀トシ、假面ヲ蒙リ、武者ニ扮スル者アリ。務テ新ヲ競ヒ、笑ヲ釣ル。其醜態、目スルニ忍ビザルモノアリ。

「じゃんがら念仏踊り」の輪の中には、女装した男性や男装した女性、さらには武士の仮装をした人たちもいたというのです。

かつての「じゃんがら念仏踊り」の輪の中には、さまざまなパフォーマンスを行う人たちがいたのです。そして、その人たちは「新ヲ競ヒ、笑ヲ釣ル」、つまり、目新しい仮装やパフォーマンスを繰り広げ、見る者を笑わせ、また、そのなかには「其醜態、目スルニ忍ビザルモノアリ」、目に余るようなことをする者もいたというのです。

かつての「じゃんがら念仏踊り」には、斬新(ざんしん)で、型破(かたやぶ)りで、破天荒(はてんこう)な要素があったのです。しかし、現在の「じゃんがら念仏踊り」には、そのようなものは見られません。

⑧「じゃんがら念仏踊り」の歌

「じゃんがら念仏踊り」の「歌（手踊(ておど)り）」の部分では次のような歌が歌われます。

ハァ～　ハァ　ハイ　モーォ　ホォ　ホイ
ナァ　ハァー　ハァ～　ハァ　メェ～
ア　セェ～　サァ　ヨォ～ォホイ
モ～ォ　ホォ　ホォ　サァメェ～
コリャナァ～　ア　ヨォ～ォ　ホォ　ホォ　ホイ
ナァ～　ハァ　ハァ　メェ～　サァ　エ～
盆(ぼん)でば米の飯(めし)　おつけでば茄子汁(なすじる)　十六ささげの　よごしはどうだい
ア　セェ～　サァ　ヨォ～ォホイ
モ～ォ　ホォ　ホォ　サァメェ～
コリャナァ～　ア　ヨォ～ォ　ホォ　ホォ
ホイ　ナァ～　ハァ　ハァ　メェ～　サァ　エ～
閼伽井嶽(あかいだけ)から　七浜(ななはま)見れば　出船(でふね)入り船　大漁船(たいりょうぶね)
ア　セェ～　サァ　ヨォ～ォホイ
モ～ォ　ホォ　ホォ　サァメェ～
コリャナァ～　ア　ヨォ～ォ　ホォ　ホォ
ホイ　ナァ～　ハァ　ハァ　メェ～　サァ　エ～
いわき平(たいら)で　見せたいものは　桜つつじに　じゃんがら踊り
ア　セェ～　サァ　ヨォ～ォホイ　モ～ォ
ホォ　ホォ　サァメェ～
コリャナァ～　ア　ヨォ～ォ　ホォ　ホォ
ホイ　ナァ～　ハァ　ハァ　メェ～　サァ　エ～

ア　コリャ　ブッツゲナンショォナ～
ア　ハィ　モォ　ホォ　ホォ　サァ　メェ～
ア　セェ～　サァ　ヨォ～ォホイ
モ～ォ　ホォ　ホォ　サァメェ～
コリャナァ～　ア　ヨォ～ォ　ホォ　ホォ
ホイ　ナァ～　ハァ　ハァ　メェ～　サァ　エ～

「じゃんがら念仏踊り」の歌には「ハァ～　ハァ　ハイ　モーォ　ホォ　ホイ」などという掛け声のような、合いの手のような部分と、きちんとした歌詞の部分があります。

このきちんとした歌詞の部分は、かつては即興、掛け合いで、次から次へと順番に歌が出され、歌われました。

「じゃんがら念仏踊り」で歌われる歌には、次のようなものもあります。

早く来い来い　七月七日　七日過ぎれば　お盆様
盆は嬉しや　別れた人も　晴れてこの世に　会いに来る
いわき名物　じゃんがら念仏　仏の供養だ　皆で踊ろよ
念仏申したって　伊達には申さぬ　仏の供養だ　南無阿弥陀仏
鉦や太鼓は　伊達には叩かぬ　仏の供養だ　南無阿弥陀仏
じゃんがら念仏で　供養をすれば　地下の仏さんも　嬉しかろ
踊り踊るのは　仏の供養　田の草取るのは　稲のため
今年ゃ豊年　穂に穂が咲いて　道の小草にゃ　米がなる
米のなる木で　草鞋を作りゃ　踏めば小判の　跡がつく
稲にゃ穂が出る　日和は続く　いわき平は　盆踊りよ
踊り見に来たか　立ち見に来たか　ここは立ち見の　場所でない
今夜この場で　踊らぬ奴は　何か仔細の　ある奴だ
盆の十六日　踊らぬ奴は　猫か鼠か　御稲荷様か

盆の十六日　踊らぬ奴は　木仏金仏　石仏

踊り踊る子は　なぜ足袋履かぬ　履けば汚れる　爪先ゃ切れる

盆が来たのに　踊る手拭持たぬ　せなさ買ってくれ　豆絞り

盆が来たのに　紺屋が焼けた　踊り浴衣を　白で着る

一度来てみな　いわきの平へ　町は火の海　じゃんがら踊り

いわき平で　見せたいものは　桜つつじに　じゃんがら踊り

いわき内郷で　見せたいものは　回転櫓と　じゃんがら踊り

いわき西郷で　見せたいものは　能満寺虚空蔵の　じゃんがら踊り

来るな来るな　勿来を越えて　盆にゃ来てみろ　いわきのじゃんがら

田村の名物　何かと聞けば　羽出庭じゃんがら　念仏踊り

羽出庭じゃんがら　念仏踊り　拝んでもらえば　天国極楽

歌は順番だよ　廻りと決めて　私歌えば　次の人

誰も出さなきゃ　わしゃ出しましょか　出さぬ船には　乗られまい

歌え歌えと　歌責められて　歌は出ませぬ　汗をかく

出たよ出た出た　いま出た声は　くぬぎ林の　蝉の声

親の意見と　茄子の花は　万に一つの　無駄はない

向かいのお山の　がんけの兎　親が跳ねれば　子も跳ねる

盆の十六日　仏様流す　私は貧乏で　質流す

盆が来たとて　何嬉しかろ　袷ほどいて　縫う単衣物

主を待ち待ち　尼子の橋に　待てば出てくる　お月様

お月様さえ　夜遊びなさる　わしの夜遊び　無理はない

星の数ほど　女はあれど　目指す女は　ただ一人

入れておくれよ　かゆくてならぬ　私一人が　蚊帳の外

色で迷わす　西瓜でさえも　中にゃ苦労の　種がある

川の向こうに　馴染みを持てば　霧し雨でも　気にかかる

浅い川なら　膝まで捲くり　深くなるほど　帯を解く

参考資料 1　喜多村筠庭『嬉遊笑覧』

はうさい念仏とて踊り狂へる念仏あり。

『似せ物語』（寛永の冊子）、「おかし男、いとかじけおとろへて米銭もなかりけり。さるを、いな事をならひて、いざなふものにつきて、世中をすぎんと思ひて、出て踊らむとて、かねなどかふて首にかけゝる。出てゆかむ心かるしとわらはれむよのはうさいを人のしらねば。をどらむと思ふ心の歌念仏ありきありきも申ぬる哉」。

『卜養狂歌集』、「ある人、はうさい念仏を画にかきて、歌よめといふ、人はみな西方とこそ願ひしにさかさまごとぞはうさい念仏」。

古き『絵巻物』（松蘿館所蔵）、はうさい念仏のさまを写せる処あり。その文に「扨もはうさい念仏とて、花を作りてかさにさし、大鼓、かねのひやうしをうち、踊りとびまはる姿をみる人おかしく、腹すぢをかゝへ、大ぜいこぞりて見侍りける。是わたくしに踊るにあらず。むかし、ひたちの国にたつとき僧一人おはしける。その名をほうさいとぞ申しける。我すむ寺、はそんいたしければ、弟子あまた引いれ、太鼓、かねのひやうしをそろへ、をどり念仏をくはだて、はんじやうの処へ踊り出て、一銭半銭の勧進を得て、堂塔がらんを建立し給ふとかや。されば、今、末代に至て、ほうさい念仏と名付、太鼓、かねをたゝき、おもしろくをどりければ、おさあひは申に及ばず、老たるも若きも、我さきとこぞり出、これを見、勧進を入ければ、おもひの儘に米銭をまつべ、破れたる堂寺、そこねたる橋までを建立をなし、其所はんじやうすると申ける」と有て、其絵、塗笠に花唐草の如き物を付、笠の縁にきぬを垂たり。服はたちつけを着て、二人は頸に太鼓をかけ、四人は鉦に緒を付て手に持、打鳴す撥を空へなげあげなどす。一人は朸にて蒲簀を担ひ、ひさくを持り。いづれも狂ひ踊るさまにて、皆、俗形なり。法師にあらず。此時、むかしといひしはいつの程にかあらん。

『そゞろ物語』、女歌舞妓の事をいふ処、「とりわけ猿若出て、色々様々の物まねする。はうさい念仏、猿廻し云々」。かゝれば、はうさいは慶長年中の事歟。

又、『可笑記』（正保元年記）二巻、「むかしさる人云、狂人走れば不狂人もはしるといへる禅話あり。げにもげにも、江戸上下の人々が、慶庵の、泡斎のと云、狂人共

が町々小路をかけ廻り云々」（慶庵のことは九の巻にいふ）。是は、かの狂ひ踊るをもて、発狂したる者に喩へていひし也。

『世事談』に「葛西の土人、鉦、太鼓に笛をまじへ、踊念仏にて江戸の大路を廻る。是を葛西念仏と云。泡斎といふことは、寛永の頃、泡斎といふ狂人の法師ありて、町小路を走る。童部集りて、気違よ泡斎よと、はやせり。今もつてかくいふ事ありて、気違ひの名目となれり。此泡斎、はやされて踊るかたち、異形にして、人のわらひをかさねしむ。彼葛西念仏が踊る処一様ならず。左りへ飛あり。右へはねるあり。頭をうなだるれば、尻をふりて、おのがむきおのがむき心々にして、定れる拍子もなく、たゞ物に狂ふがごとし。泡斎坊が踊るにひとし。よつて泡斎念仏と呼。誠に気違念仏踊ともいふべき也」といへり。泡斎を寛永の頃といへるは、伝聞の誤なるべし。扨、此説、前に引る古画の記文と異なれ共、これは関東の事なれば、沾涼が説、然るべし。堂塔建立の説はたしかならず。何といふ寺とも聞えざるやうやあるべき。其後、此念仏廃れたれども、下総佐原のあたりには、今も年老たる者、家事を子孫に任せて、其身逸楽なるは、男は太鼓を打、女はをどりをならふ。年老て、いと似げなき事也。おもふに、其始、葛西念仏の踊なりしが、いつの程よりか、あらぬ小歌をうたひ踊るなるべし。

参考資料 2　**斎藤月岑『武江年表』（「寛永年間記事」）**

寛永の頃、泡斎といふ狂僧、町小路をはしる。わらんべ集りて、気違ひよ、はうさいよとはやせり。今以てかくいひて、気違ひの名目となれり。其の泡斎はやされて踊るかたち、異形にして人の笑ひをかさねしむ。後、葛西の土人、踊念仏とて、江戸大路を徘徊す。其のさま、物に狂ふがごとくにて、彼の泡斎がさまに似たりとて、泡斎念仏ともよびけるよし、『世事談』にいへり。

筠庭云ふ、『世事談』、はうさいの説、然るべし。但し、はうさいは寛永以前よりいへる事なり。考へあれども長ければ記しがたし。

無声云ふ、はうさいは慶長以前よりありて、狂僧にあらず。『ほうさい念仏絵詞』（寛永頃のもの）に、昔、常陸国に貴き僧一人おはしける。其の名をば、ほうさい坊

とぞ申しける。我が住む寺破損しければ、弟子あまた引きつれ、太鼓かねの拍子をそろへ、踊念仏をくはだて、繁昌の所へ踊り出で、一銭半銭のくわんじんを得て、堂塔伽藍を建立し給ふとかや。されば末代に至つて、ほうさい念仏と名付け、太鼓かねをたゝきて、面白くおどり云々とあるにて知るべし。

参考資料 3　**高木誠一『石城北神谷誌』**

念佛講

これは爺婆の倶樂部の様なもので、六十歳頃になつて隠居して、格別、家に用のない年寄など、酒一舛位を持参して、この仲間に入れて貰ひ、毎月二十四日の月念佛、さては盆、彼岸、虫供養、馬頭觀音、藥師、其他、臨時に雷神、雨乞、テントウ念佛など、年に幾回となく集まつて念佛を申す。サシ會費は五銭位、ニガシ酒肴はトウマイ當番で、念佛の後で酒を呑み、物を食ひて興じるのである。

年回に相當つた佛のある家ではイレメイと云ひ、酒三舛、乃至、五舛位、手拭などをあげて念佛回向して貰ひ、又、立念佛と云つて、あげた手拭をかぶつてジヤンガラ念佛を踊つて貰ふを常とす。

又、不幸のある家では、招聘して牡丹餅の御馳走をなし、佛マブリ逮夜して貰ひ、埋葬の時は棺の後について、鐘太鼓でジヤンポンジヤンポンと野辺送りをする。之を送り念佛と云ふ。

この念佛講の唱文は、懺悔文、舍利、發願文、般若心経、色々な和讃等である。この講は村に於ける元老院とも云ふべきもので、村に出来たモメゴト葛藤などは出てすまないことはない。權威ある講である。

参考文献

『いわき市史　第7巻　民俗』いわき市史編さん委員会　いわき市　一九七二年
『福島県史　第23巻　民俗1』福島県　一九六四年
『内藤侯平藩史料　全六巻』平市教育委員会　一九六一年
『四倉史学会会報　第十一輯』四倉史学館　一九七三年
『潮流　第31報』いわき地域学會　二〇〇三年
『磐城誌料歳時民俗記』大須賀筠軒　歴史春秋出版　二〇〇三年
『石城北神谷誌』高木誠一　雄峰社　二〇〇七年
『いわきのじゃんがら』いわき市教育委員会　一九七九年
『いわきのじゃんがら念仏調査報告書』いわき市教育委員会　一九八九年
『いわき伝統芸能フェスティバルの記録　第一回～第五回』
いわき伝統芸能フェスティバル実行委員会　一九九六年
『いわき伝統芸能フェスティバル　第8回』
いわき伝統芸能フェスティバル実行委員会　一九九九年
『いわき伝統芸能フェスティバル　第9回』
いわき伝統芸能フェスティバル実行委員会　二〇〇〇年
『ぢゃんがらの国』夏井芳徳　歴史春秋出版　二〇一二年
『じゃんがらブック』いわき市文化活用実行委員会　二〇一三年
『じゃんがらブック2』いわき市文化活用実行委員会　二〇一三年
『澤村勘兵衛とぢゃんがら』夏井芳徳　いわき総合図書館　二〇一四年

じゃんがら念仏踊りの歴史展

平成二十八（二〇一六）年六月二十五日～十二月二十五日

いわき市立いわき総合図書館　五階　地域資料展示コーナー

いわき市立いわき総合図書館

〒九七〇―八〇二六　いわき市平字田町一二〇　ラトブ内

電話番号〇二四六―二二―五五五二

いわき市立図書館キャラクター

「かもまる」